

公益社団法人隊友会

館山支部だより

平成28年9月号 (通巻76号)

支部の連絡窓口

千葉県隊友会館山支部
事務局(代表) 川村 巖
〒294-0032館山市笠名1357
電話0470(22)0230

女子プロレスラー“心肺停止の観客を救う！”

TV画面のテロップに続くインタビューで「私、看護師資格を持つ予備自衛官です。毎年、招集訓練でAEDの操作には習熟してます」と胸を張って自己アピールする態度に好感と頼もしさを覚えた。“永遠の17歳”をトレードマークに青春を謳歌する女性予備自プロレスラーに惜しみないエールを送りたい。**“若い隊友会員”に励まされた老兵集団！**

昨年の今頃、千葉県隊友会が常総市豪雨災害復興支援ボランティアを編成して復旧作業に従事した際、メンバーの中に陸士長出身の予備自衛官がいた。家業の工務店を経営する傍ら、県隊友会理事として現地災害対策本部との調整に奔走し、作業現場では我々“老兵”を気遣いつつ テキパキと作業要領等の伝達など、集団行動のツボを

支部活動の概要 (実績&予定)

《8・9月の活動実績》

- 8.20(土) 市民講座(館山市中央公民館) 「“歴史認識”と館山の旧軍・戦争」
- 8.30(火) 現地研修支援(君津史跡研究会、下滝田)

《10・11月の活動予定》

- 10. 8(土) 千葉県護国神社秋季例大祭奉仕作業(千葉)
- 10.10(月) 安房神社旧海軍戦没者慰霊祭

市民講座「歴史認識問題」に斬り込む！ 8.20(土) 館山市中央公民館

今夏の市民講座(「ふるさと講座」)は、従来と異なり、歴史認識をテーマに掲げ、一步、歴史認識問題に踏み込むことにより、この問題に対する市民一般の捉え方、反応の一端に触れることができれば、という期待を込めたものです。5月の憲法・安保投稿とも関連して、心中、疑心暗鬼の念もありましたが、案の定、聴講者から出された二三の質問からも、歴史認識に対する人々の考え方に大きなギャップ・温度差があることを実感させられた次第です。

歴史認識問題は、極めて難しく悩ましい面を持っていることは確かです(下記参照)。かと言って、時が過ぎれば自然と解消される性質のものではなく、“日本人が自ら解決すべき問題”だと思っております。「泣き寝入り」や「拱手傍観」は美德に非ず！ 国民の一人として、「(念入りな調査・追究のもとに)主張すべきところは主張する」のが、我々子孫のため、千葉県隊友会員へ投稿予定です。

<注>「歴史認識問題」のルーツを辿ると

この問題の出所(処)が、東京裁判(極東国際軍事裁判 S21~S23)にあり、昭和27年の対日講和条約(サンフランシスコ)において日本政府が東京裁判の判決を無条件に受入れ署名したことにより、これが今日まで太平洋戦争(15年戦争)に対する政府の公式見解とされ、「国是・国家行動の基本準則」にまでなってしまった感があります。



トピックス 防災出前講座で危機管理監が講義 9.1(木) 館山総合高校

「防災の日」の1日、館山総合高校において、渡邊浩一郎館山市危機管理監(館山支部会員)による防災講義が行われ、同校生徒や職員、PTA関係者ら500人近くが熱心に聞き入った。この催しは後援会組織(「うしお会」)の肝入りにより同校同窓会が企画したもので、この日の防災訓練の一環として避難訓練に引き続き講義として行われ、地震・津波発生直後の対応や災害に備えた準備・対策等、いつ発生するか分からない災害に対する常日頃からの千葉県隊友会員へ投稿予定です。

※「館山支部だより27.11月号」で紹介済ですが、渡邊浩一郎会員は昨年4月館山市が初めて設けた危機管理監に任命され、市長公室・社会安全課で執務中です。危機管理監として災害発生時における防災対策本部長(館山市長)の重要な補佐役を務める一方で、平素においては防災計画・対策及び市民の防災意識の普及高揚、防災訓練指導の面で、海自勤務での災害派遣・部隊指揮運用の豊富な経験を基にしたさらなるご活躍を祈念す

新入会員紹介

8月期 土屋 公規会員(海、21整補隊)、福永 豊会員 (海、21整補隊) 海自での勤務を全うされ、館山支部への即日入会を歓迎いたします。

レクイエム

9/27 澁谷 憲二会員(海) ご逝去 享年83歳

投稿

“韓流時代劇” にハマる・癒しと実益を求めて

ここ二三年、朝食後のひとときをTVの韓国歴史ドラマを楽しむことが日課になった。夜中の浅い睡眠を補うための朝寝のつもりであったが、すっかりトリコになってしまった。入れ替り立ち替り事件や騒動、陰謀が飛び出し、秀吉の朝鮮出兵シーンが出てきたりで理屈抜きで面白い。難点は登場するキャスト(イケメン男優)の顔が皆同じに見えて、ドラマの筋道を理解するまでに大分日数がかかることである。時代スパンも 百済・新羅・高句麗の三韓時代から高麗時代を経て李氏朝鮮の王朝時代に及び、絵巻物を通じて朝鮮をめぐる歴史の勉強？にもなって一挙両得というところか。

長い間、異民族の支配を受けていた朝鮮王国

長いこと「朝鮮」という国がよく理解できなかった。独立した国家なのか、明・清国との関係がどうなっているのかなど、疑問が沢山あった。王朝時代を描いたドラマには、明国(滅亡後は清国)が朝鮮の「宗主国」として君臨する場面がよく出てくる。朝鮮が国の制度を変えたり、他国への出兵(戦争)や次期国王候補(王子)の決定に際して、宗主国皇帝の承認が不可欠とされ、国政上、いろいろと厳しい制約を受けていた様子がドラマでもよく描かれている。

清朝崩壊後、列強諸国の確執・侵略に翻弄され続けた朝鮮

これから先のことはまだドラマに登場していないが、朝鮮がどのようにして今日に至ったのか、その歴史の過程を知ることは朝鮮だけではなく、日本が絡んだ15年戦争に至る過程を調べる上でも欠かせないことと思う。清朝の崩壊(1912年)によって朝鮮が隷属国から解放されて独立国になったのかと言うと決してそうではない。アヘン戦争(1842年)以降、宗主国の清国は列強による植民地政策の起点になり、日清戦争の敗北によって朝鮮に対する清国の宗主権が完全に失われたことによって、朝鮮に対する列強(日本を含む)の侵略的行為が一段と激しさを増した。このような情勢下、満州・朝鮮の権益確保を南下政策の至上目的とするロシアと、同時にこれを資源確保・防衛上の生命線とする日本の大陸政策との対立が背景となって起ったのが日露戦争であった。日露戦争の勝利によって、日本はロシアの南下政策を食止め、韓国併合により朝鮮を日本の植民地と化した。これ以降は省略。大戦の終結によって朝鮮は日本の植民地支配から解放されたが、38度線で分断され米国とソ連によって占領統治された。結局、朝鮮が他国による長い支配から解放されたのは、朝鮮動乱の1年前のことで、南朝鮮は「大韓民国」、

随想

南房総の陸軍本土決戦部隊・陣地の構築と終戦

南房総(ここでは鋸山以南の安房地方)では、あまり陸軍の話は聞かれない。陸軍部隊が居なかったのかという然(さ)に非ず。陸軍は明治後期から、三浦半島や房総中部などに東京湾要塞の砲台を構築し、大正末期から房総南部にも大房岬砲台、洲崎第一砲台・第二砲台を構築して東京湾の防備を固めてきた。しかしながら日米開戦とともに戦線が太平洋・南方諸島へと拡大し、東京湾要塞という防衛戦略も次第に意義が薄らぎ、19

「東京湾兵团」の誕生・陣地の構築

大本営(陸軍)は昭和19年7月以降、「本土沿岸築城実施要綱」及び作戦計画要綱の策定など、本土決戦体制の整備に本腰を入れた。房総地域についても20年以降、永久要塞・水際陣地等の抵抗拠点の建設に拍車がかけれ、部隊の配備については最終的に房総南部を守備範囲とする東京湾兵团が編成され、20. 4に船形に兵团司令部が設けられた。東京湾兵团は、砲兵・歩兵部隊から成る約4万名の兵力であったが、すでに実戦経験のある部隊・兵士の大半が中国・南方戦線に投入され、配員された兵員の多くは補充兵で占められていたと言われる。あわせて武器・弾薬の絶対数・量の不足も深刻な問題であり、陸軍の武器不足を補うため海軍が急遽、閉校間近い館山砲術学校西砲台の高角砲6門を、水平砲に改造して弾薬とともに陸軍に貸与(20. 5)するという状況であった。

終戦余談 2話

得てして旧軍とか戦争は“珍奇・奇怪な伝説”を生み出す温床になりやすい。東京湾兵团に関わる二つの事例を紹介することにする。

<事例1>

終戦の詔勅が下された直後、兵团の一部の高級将校が徹底抗戦を主唱して部下を扇動し、不穏な状況に陥ったと言われ、最終的には兵团司令官が首謀者を憲兵隊に引渡すことで事態は収拾された。

<注>実際にあった事件で、「軽挙妄動を戒める」司令官の終戦直後の訓示とともに記録として残されている。

<事例2> (“元陸軍准尉”の回想を基に 2004.7 朝日が記事に掲載)

マッカーサーの厚木到着(20.8.30)に際し、東京湾兵团司令官がマッカーサー搭乗機の撃墜を企てたという。これを知った大本営が、陸軍准尉(23歳とか)を船形の兵团司令部に赴かせ、司令官を説得し事無きを得たというお話。

